

旭市サンライズプラン

——ほんわか土づくり作戦——

いけ だ とおろ
池 田 徹

昨年、この欄で、旭市環境保全・循環型農業モデル事業について報告し、最初の事業である、「田んぼで備蓄！飼料用米栽培事業」の概要について書いた。約100人の農家が3,400俵の米を収穫し、昨年11月から養鶏の餌として給餌が開始された。まさかのときは人間が食べるという「備蓄」がコンセプトだから、飼料米といっても人間が食べる「初星」を作付けた。12月には米生産農家、卵生産農家、消費者、行政関係者が一堂に会して「飼料米」で作ったおにぎりをみんなで試食する「ランランフォーラム」を開催した。

飼料米栽培事業は、今年度、八つの営農組合で3,800俵の収穫を予定して継続されている。品種は昨年同様初星が中心だが、実験的に飼料米多収穫米を0.3ha作付けてみた。この秋には、本物の飼料用米も人間が試食してみようと思う。

今年度は上記の事業に次いで、「ほんわか土づくり作戦——畜産堆肥資源化計画——」を開始した。目的と内容は次のように述べられている。①畜産糞尿（堆肥源）処理対策事業を体系的に進め、組織的な仕組みとして展開します。②畜産糞尿を有効な資源として活用し、旭市管内でできた堆肥を管内の田畑に還元することをめざします。

7月には、農水省畜産局長を招いて「ほんわか土づくり作戦会議」を催し、農家、消費者と畜産局長の大激論を行い、作戦の開始を宣言した。

具体的にはこの秋、日大の生物資源科学部畜産経営研究室に依頼して、旭市管内の耕種農家、畜産農家の意向調査を実施することから始める。調査目的は「地域循環農業の可能性と方向性を探る」ことであり、農家への調

査内容は、①経営の概況 ②糞尿の処理・利用方法（畜産農家）、堆肥の利用（耕種農家）③農地の利用集積と作業外部化の現状 ④生協との産直の可能性、などである。この調査に基づいて、畜産農家、耕種農家その他サンライズプラン関係者などによる「ほんわか土づくり委員会」を発足し、畜産廃棄物の地域循環システムづくりをスタートさせたいと考えている。

今年4月に開かれたサンライズプランの定期総会におけるシンポジュームのパネラーとして、私は以下の発言をした。長くなるが、その内容を紹介して、サンライズプランへの思いとねらいを理解していただければ幸いである。

『先日、例の所沢のダイオキシンの問題がありまして、私どもの生協でもずいぶん議論がありました。たまたま生活クラブの提携生産者には所沢市内の方はいらっしゃらなかったんで、直接、取り扱っている野菜をどうするかということは考えずにすんだんですけど、市内の農家と産直をやっているような団体は非常にまちまちな対応となりました。取り扱いを一切中止するということもありましたし、逆に農家を支援するために取り扱いを断固続けるというような声明を出したところもあります。』

私がこの問題から考えるのは、結局どの団体の対応が正しかったというふうに言える正解はないんじゃないかということです。結局学んだことは、1生産者・生産者団体と、1消費者なり消費者団体との取組という、点と点で提携して、線で結んでいるという関係では解決のしようがない問題だったんだと。提携を続けるかとか、取組を中止するかとかいう問題ではない、違う次元の考え方で考えていかないと、この問題は解決しないと考えたわけです。ダイオキシン問題に限らないで、点をつなぐ関係では解決しないという問題がたくさんありまして、たとえば米の自由化問

題なども、あるところまで来ると、消費者にとっては価格のところで選択をするというか、今までは国内の物を食べていたけれども、こんなに価格に差があるんじゃないやということで、外国の物を食べ始めるだろうとか、そういう点はどうしてもでてくるでしょう。遺伝子組み換えの問題とか、特にこれから重要だと思うのは「種」の管理の問題とか。そういうことを通して、国家レベルで政策として考えていかななくてはいけない。そうでない限り、点と点のつながりでは解決できないという問題はたくさん出てきていると思います。

私はサンライズプランは、そういう問題に対しての一つの答えではないかと思っています

す。今までは私どもが旭の生産者の皆さんと点と点をつなぐ形で産直に取り組んできましたけれど、それをサンライズプランは地域と地域全員のつきあいにしていくというか、面として解決していくというところにまで階段をのぼってきたんだろうと思います。こういう「面の取組」が、全国各地に広まっていくことで、今度は国のレベルでも、いわば立体的な政策にまで反映させていくことができる、そういう役割をサンライズプランは持っているのではないかと思います。』

どうぞ、サンライズプランの今後にご注目下さい。

(千葉県美浜区・生活クラブ生協)